

あらゆる側面を分析しなければならない

おなじみの手だ！ 理論に根拠のないことを証明するために、ミハイロフスキー氏はまずはじめにその理論を歪曲して、社会生活の総体を考慮に入れないという、ばかげた意図をこの理論になすりつけ——ところが、これとはまったく反対に、唯物論者（マルクス主義者）は、社会生活の経済的側面ばかりでなく、そのあらゆる側面をも分析しなければならない、という問題を提起した最初の社会主義者なのに——、ついで、「実際には」唯物論者が社会生活の総体を経済によって「りっぱに」説明していることを（これは明らかに、この筆者をうちやぶる事実であるのだが）確認する。そして、最後に唯物論は「自己の正しさを証回しなかった」という結論をくださるのである。……………

（このことは、『資本論』や、往来の社会主義者とくらべての社会民主主義者の戦術のうちに、まったく明白に表明されている。マルクスは、経済的側面だけにとどまってはならないという要求を、率直に言明した。1843年に、マルクスは計画中の雑誌の綱領の要点をえがいて、ルーゲにあてた手紙につきのように書いた。「ところで、その社会主義原理全体が、……………やはり一つの側面でしかない。われわれとしては、もう一つの側面、すなわち人間の理論的存在にも、同様に注意をはらわなければならない。つまり、宗教や科学等を、われわれの批判の対象としなければならない。……………**宗教**が人間の理論的闘争の内容目録であるのと同様に、**政治的国家**は人間の実践的闘争の内容目録である。すなわち、政治的国家は、自己の形態のわく内で、すなわち、*sub specie rei publicae*〔国家の形態において〕（政治的視角から）「いっさいの社会的闘争、欲求、現実を表現するのである。だから、もっとも特殊な政治問題——身分代表制度と代議制度との差異というよう——を批判の対象としたところで、けっして *hauteur des Principes*〔主義の高さ〕をおとしめることにはならない。なぜなら、この問題は、人間の支配と私的所有の支配との差異をただ政治的に表現しただけのものだからである。だから、批評家は、がんめいな社会主義者たちの意見では論じるにたりないものとなさされている、これらの政治問題に立ちいってよいばかりでなく、立ちいらなければならないのだ。」〔補巻4、222~223 ページ〕

第一巻 「人民の友」とはなにか P157~158

コメント

マルクス主義者は経済的側面だけでなく宗教や科学等の理論闘争と同時に政治的国家の特殊な政治問題も批判の対象にしなければならない。そのためには、それらの問題がどの階級の利益になるのかを明らかにする必要がある、そのことを通じて政治的国家の実像を暴露することが大切である。